

方向

第一四六号 一九九二年七月一日

京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内 方向 社

陶器と使い方 一法華經巡礼 74

1992.6.18 原田憲雄

「葉草喩品」のここから続くのは、前回でいったように、妙本には無く、梵本・正本・添品にはある部分である。正本より添品のほうが梵文にちかく、また添品は一般に参考にされることが少ないので、ここでは梵文の後に引いておく。『大正新脩大蔵經』によるが句読点はあらためた。

05-09. またつぎに、カーシャパよ、如来は、衆生の指導には平等であつて不平等ではない。たとえば、カーシャパよ、月や日の光が一切の世界を照らし、善行のものにも不善行のものにも、高処のものにも低処のものにも、芳香のものにも悪臭のものにも、一切のところに平等に光を注ぎ、差別することがないようなものだ。そのように、カーシャパよ、如来・尊敬されるべき・正しく覚つたひとの放つ、一切を知る者としての智慧と、心の光は、五つの生存領域のすべての衆生を照らし、信解に応じて大乘・独覺乘・声聞乘とされる者らにも、正法の説示が平等になされるのだ。その如来の智慧の光には、不足も過剰もなく、福德や智慧が成就する。三つの乗は、カーシャパよ、存在しない。ただ、衆生がそれぞれに行動する、そのゆえに、三つの乗が仮設されるのだ。

punar aparāṃ kāśyapa tathāgataḥ satva-vinaye samo na cāsamāh / tad-yathā kāśyapa candra-sūrya-

prabha sarva-lokam avabhāṣayati kuśala-kāriṇam akuśala-kāriṇam corahvāsthitam adharāvasthit-
am ca sugandhi durgandhi ca sarvatra samam prabhā nipatati na viśamam / evam eva kāsyaṣa lata-
gatānam arhataṃ samyak-sambuddhānaṃ sarvajña-jñāna-citta-prabhā sarveṣu pañca-gaty-upapannesu
sattveṣu yathā dhimuktim maha-yānika-pratyekabuddha-yānika-śrāvaka-yānikesu sadharma-deśana-
samam pravartate / na ca tathāgatasya jñāna-prabhāya ūnata vā tīrikatā vā yathā puṅya-jñāna-
samudāgamāya sambhavati / na sanhi kāsyaṣa triṇi yānāni kevalam anyonya-caritaḥ sattvaḥ / tena
triṇi yānāni prajñeḥpyante ||

復次迦葉。如來。於諸衆生。調伏平等。迦葉。譬如日月光明。照於世間。若作善。若作不善。若高處住。
若下處住。若香若臭。諸處平等。光照無偏。如是迦葉。如來正遍知。一切種智。心之光明。於諸五趣。
衆生受生之中。如其信解。大乘緣覺乘聲聞乘中。為說正法。平等而轉。如來智慧。亦無增減。如其福智。
聚集而生。迦葉。無有三乘。唯彼衆生。別異行故。施設三乘。

わたしが「指導」と訳した vinaya には「除去する」という意味があり、相手の考えや行動から誤ったものや
不純なものを取り除く方向での指導をさし、添品ではそれを生かして「調伏」と訳したのであろう。

「五つの生存領域」は、地獄・餓鬼・畜生・人・天（神）の五つで、われわれの現実生活の功罪によって趣き
生ずべき境界をいうが、いわば迷える人間の生存のありかたで、「五趣」とも「五道」ともいい、これに阿修羅
をくわえて「六趣」とも「六道」ともいう。

大乘・独覚乗・声聞乗や三乗の「乗」が乗物の意で、凡夫から仏となるにいたる教えを乗物にたとえたことは、前に繰り返し述べた。「独覚」は *pratyekabuddha* (辟支仏) で、それを「縁覚」とするのは、十二因縁を觀じて迷いを断ち覺りをひらいたひと、という意味である。

「仮設」と訳したことばは、知らせるための手段・方法として施設する、というほどの意味をもつ。

05-10. こういわれて、長老マハー・カーシャパは、世尊に、次のようにいった。

「もし、世尊よ、三乗がないのならば、なぜ現在、声聞・独覚・菩薩という仮の名称が設けられるのですか」

*evam ukta ayusmān mahākāśyapo dhagavanam elad avocati yadi dhagavan na santi tṛiṇi yānāni kim
kāraṇam pratiyutpane dhvani śrāvaka-pratyekabuddha-bodhisattvānām prajñaptiḥ prajñapyate||*

慧命摩訶迦葉。白仏言。世尊。若無三乘。何故現世。施設聲聞緣覺菩薩。

もともと無いものならば、なぜ仮設するのか。そのことの手段・方法としての意義を、問うた。

「慧命」とは修行僧の尊称で「具寿」ともいい、梵語の原意は「若い人」というほどの意。わたしは「長老」と訳しているが、その理由は前に記した。

05-11. こういわれて、世尊は、長老マハー・カーシャパに次のようにいった。

「たとえば、カーシャパよ、陶工が同じ粘土から容器をつくるようなものだ。そのときあるものは糖蜜の容器となり、あるものは酥油の容器となり、あるものはヨーグルトやミルクの容器となり、あるものは下

等な不淨の容器となる。粘土に違ひはないのだが、投げ込まれるものだけで、容器に差異が区別される。ちようどこのように、カーシャパよ、ただこの乗、すなわち仏乗だけがあるのであって、第二の、あるいは第三の乗が存在するのではない。」

evam ukte bhagavan ayusmantam mahakāśyapam etad avocāt / tad yathā kāśyapa kumbha-kārah samāsu
mṛttikāsu bhajānāni karoti / tatra-kāni-cid guda-bhājānāni bhavanti kāni-cid ghṛta-bhājānāni
kāni-cid dadhi-kāira-bhājānāni kāni-cid dhṛṇany aśuci-bhājānāni bhavanti / na ca mṛttikāyā na-
nātvam atha ca dravya-prakṣepa-mātreṇa bhājānānam nānātvam prajñayate / evam eva kāśyapaikam
evadam yanam yad uta buddha-yanam na dvitīyam na tṛtīyam vā yanam samvidyate ॥

仏告慧命摩訶迦葉。譬如作瓦器者。等和土泥。而用作器。彼中或有。盛沙糖器。或盛酥器。或盛乳酪器。或盛惡糞穢器。泥或無有。種種別異施設。如是迦葉。此唯一乘。所謂大乘。無有二乘。及以三乘。

05-12. こういわれて、長老マハー・カーシャパは、世尊に次のようにいった。

「もし、世尊よ、さまざまの信解の衆生が、三界を出離したら、かれらにはただ一つの涅槃があるのですか、あるいは二つですか、三つですか」

evam ukta ayusman mahakāśapo bhagavantam etad avocāt / yady api bhagavan sattva nānā dhimuktayo
ye tṛaidhātukan nishṛtāḥ kim tesām ekam nirvāṇam ale dva W. nirvāṇam uta dve tṛiṇi vā ॥

慧命摩訶迦葉。白仏言。世尊。彼諸衆生。種種信解。若出三界。彼等為一涅槃。為當二三。

毎年四月の中頃に「お千度のおさがりです」と言って町内会の組長さんが配り物をする。今宮神社のお札と清酒の一合瓶が一本、するめと昆布が一センチ角ほどずつと白米が五粒くらい半紙に包んだものである。

「お千度」というのは氏神さんへの千度まいりのことなのだが、どんなことをするのか、わたしはいつも興味を感じていた。お百度を踏むという言葉もあるから、何かそれらしいことをするのだろうかと思って想像していた。母がいた時には町内の仕事はみんなまかせっきりで、わたしはあまりかかわってこなかった。久し振りに組長の順番がまわってきて、四月十九日に今宮神社へお千度に行くことになった。

その日は雨になったが、役員九人が、午前十時頃に出発した。今宮神社はバスで十五分ほどの所にあり、バスは神社の朱塗りの楼門の前で止まる。社務所の前に天幕が二張り建てられ、大勢の人が溢れていた。みんなそれぞれ氏子町内の人らしい。天幕の中に床几が並べられ、町ごとにかたまって掛けたり立ったりして雑談しながら順番を待っている。偶然にこの日曜日はお千度の町が多かったようで、ずいぶん待たなければならなかった。薄ものを着てきた人は寒そうで、わたしは冬の上着でちょうどよいような気候だった。放送で「〇〇町様おけいり下さい」と呼ばれる度に、「ああ、うちやうちや」と待ちかねたようにつぶやきながら十人余りの人のかたまりが立ちあがる。あたふたと傘を置き靴をぬいで、神殿の中へあがって行く。お参りが多いので長く待たされないうように、本殿と結婚式をする部屋と両方で二町内ずつがお祓いを受けているらしい。「おんなじことなら、む

こうの方がええなあ」と言っている人がある。本殿でお祓いをしてもらうほうがよいというのである。

ほとんどの町がすんで、わたし達は終りの方だった。「福島町様お入り下さい」と呼ばれて「ああやっとうっ」とこや」と言いながら急いで靴をぬいで上がった。「あちらへどうぞ」「どこやて？ 本殿か、よかったよかった、あっちの方が何となく有難い気がするやんか」などごちゃごちゃ言いながら段を上がって神妙に渡り廊下を歩いていった。

一合瓶を町内の戸数分用意してきているのでこれを神殿に供え、廊下に置かれた長い腰掛に並んで掛けた。みんながかしこまっていると、高い神殿と廊下の中段くらいところで神主さんが御幣を振ってのりとを読まれる。福島町の役員が代表で祈願する。今年も町内のみんなが安全に健康にすごせますように、お守りください、というようなことらしい。この本殿には、大己貴命（おおなむちのみこと・農業畜産、医薬、酒造の祖神）事代主命（ことしろぬしのみこと・商業の神）奇稲田姫命（くしなだひめのみこと・夫婦和合、家内安泰の神）の三座が祀られている。

その後、町会長さんが中段まで上がって拝礼され、みんなが一緒に拜んで終わりだった。あっという間のお千度である。

お供えした清酒を持って帰ってお祓いを受けたおさがりとして町内各戸に配るわけで、その時に神社からお札とともにもらう紙包みの中身は、するめと昆布と米である。

お祓いがすんで外へ出ると、東門から出て、名物の「あぶり餅」というのをみんなで食べる。これも例年の習

憤らしいが、一皿ずつがそれぞれの前に出される。小さなかけらのようにちぎった餅の屑のようなのを竹串にさして炭火で焼いたのが、六本ほどに甘い味噌のたれがかけてあった。見かけよりは香ばしくておいしい物である。名物だから、いつも店にはたくさんの人が入って食べている。ゆっくり休んでからバスに乗り、町会長さんの家まで帰っておさがりを分けた。清酒は一本ずつ、お札は一枚ずつあるが、するめやこんぶを戸数に分けるとやっとなつめるほどの小さなものになる。それを配ると、それぞれの家庭で人数に分けて神様のお下がりとして頂くのだが、こうしてお千度に参拝しなかった人達も神様の福徳を授かることになり、神社へめったに行かず、祭祀にかかわらなくても氏子であることにまちがいないのである。

「お千度」というのはただこれだけのことだったのかとあっけなく思ったが、後で知ったところによると、以前はもう少しそれらしい行事だったようである。毎年、町内会の役員が交代する四月頃に、みんなでそろって氏神さんへ行き、町内の安全と無病息災を祈った。京都市内で氏子をたくさんもっている神社は、祇園八坂神社、伏見の稲荷大社、北区の今宮神社、右京の松尾神社などがあるが、どの神社も、町内の役員が交代する時期に「お千度」に参るらしく、これは江戸時代から続いている習慣だそうである。昭和三十年代までは盛んに行なわれ、町の人みんなが参拝し、竹べらや木札を持って境内をぐるぐるまわったのを合わせれば千度まいったことになる、融通しあうということで、融通念仏なども同じことである。愛宕神社の「千日詣」は毎年七月三十一日の夜から八月一日の朝にかけてたくさんの方が山に上るが、これは山伏の千日行の結願に人々があやかうとしたのだというし、清水寺の「千日詣」は本尊の縁日に大勢でまいて、千倍の御利益をいただくという日だそうである。

「お千度」も同じようなものだったと考えられる。またあまりいろいろな楽しみもなかった頃には、これが町内の娯楽でもあって、みんな「お千度」をすましてから会食をし、子どもはおやつをもらって、一日を楽しく過ごしたのだそうである。

わたしの生まれた地方には「お千度」というのはないが、田植えの終わった六月頃と収穫前の二百十日に「湯立て式」というのがある。ふつう「お湯が上がる」と言うが、これはやはり豊作祈願と親睦会をかねた娯楽のようである。大きな釜に湯を立てて、そこへ酒を入れ、クマザサの束でそれをかきまぜてあたりを祓いながら娯楽が舞われる。その娯楽舞いの人を「おかあさん」と呼ぶそうだけれど、どうしてかわからない。後のお湯は土瓶に入れて持って帰り家族が頂き、クマザサは家に同居している農耕用の牛に食べさせるのである。

湯立て式がすんだ後は、村の人がそれぞれに持ってきたぼた餅、すし、だんご、その他いろいろな食べ物を、やったりもったりして分けあって食べるのだが、そうすることで親しみを深めるのだと思う。だから、よその土地から来た人はなかなか仲間に入れてもらえず疎外されるらしい。こういうところは大変に閉鎖的で陰険にさえ感じられるが、長い間の積み重ねだから、現在も続いているようである。京都では近年「お千度」がお祓いだけで終わることが多く、境内をまわり歩く町はまれだそうである。バス旅行やお花見に変わってしまったところもあるというのは、祈願の意味が忘れられて娯楽面が強調されたり、信仰の自由で個人の意思が尊重されるようになったせいもあるのかもしれない。

今宮神社の氏子は十九学区、およそ二万戸あるそうである。氏子というのはその神社の祭祀圏を構成する人の

ことで、年中、特定の祭儀のためにほとんど義務的になんらかの形で参与するものであるとされる。氏神というのも、もとは字のとおり同族の神だったのが、社会単位が同族集団より地縁集団に移行してきて、神を媒介にして同族でない人が寄ってまつる産生神となった。同族でない人が同族的な気分を持って強く結びつくようになってたのが氏子というものらしいのである。氏子の仲間にいることは、人の出入りの少ない地方に行くほど大切なことで、できるだけしっかりと輪をつくり、閉鎖的で仲間以外のものを締め出そうとする傾向が強くなるのは仕方のないことなのかもしれない。もとはその土地の人でも、一度外へ出てしまうと、戻るのが容易ではない。そのような例はいくつもあり、寂しい思いをしている人があるのである。以前は村に青年団というのがあって、その運動会になると、応援歌の中にも氏神さんが出てきて、今年自分達の勝だというお告げを出す。太鼓をたたいてその歌をうたうと仲間意識が高まって大いに盛り上がり、選手は氏子の名譽をかけて全力で走るのだった。

京都に来ては氏子というものがあり、今宮神社の氏子であるというのが不思議に思われたが、いつのまにかそれなりに親しんでしまっている。神棚はないので祀ってはいないが、祭の神輿さんが通るときには、お札を持った人が、お神酒をお願いしますと入ってくる。初めは、寺へ神様のお札を持った人がなぜ入ってくるのかと思ったが、この頃は何とも思わなくなった。お神酒代をあげると門の前で神輿さんの鈴や金の飾りをガチャガチャと振ってくれる。これも馴れてしまえばそれほど気にもならなくなった。

六月は祭もすんで特に何もない月である。今宮神社へ行ってみると、静かだけれど若い人がおみくじを引いたり、家族づれが拝殿の軒の鳩の巣を見上げていたり、絵馬堂で熱心に本を読んでいる人などもあって、参詣

の人が絶えることはないようだった。神殿への入り口の方へ行ってみると、渡り廊下の外の所に大きな木の箱に竹べらがいっぱい入ったものが二個、積み重ねられている。巾が一センチ余り、長さ十五センチくらいの竹で、内側に奉納した人の名前と年齢が墨で書いてある。それぞれに連う名前だったから、ひとりひとりが竹べらを奉納したことになる。これを何本か持って、境内をまわり、一本ずつ戻して行って手もとになくなったら、それだけの回数まわったことになるのだろう。町内の「お千度」の時にはまわっている人を見かけなかったけれど、ここに用意されていたのだなあとと思って、古くなった竹べらを何本かとして手でほこりを拭いてみた。あまり使われていないせいか、干からびているような感じがしたが、かつては人々に握られて境内をまわった竹べらに違いない。

竹べらを箱にもどしてわたしは境内をまわっていった。本殿の前に大勢の旅行客らしい人が立って中をのぞいている。今宮神社も観光のうちに入っているのだろうか。船岡山、紫野、蓮台野、やすらい祭などの名称が美しいことや大徳寺に近いということもあって、観光コースに入ることがあるのかもしれない。地方でも同じだけれど神社もその祭も昔とはずいぶん変わってきている。祇園祭は鉾を守ってきた町衆と呼ばれる八坂神社の氏子には、新しく移り住んだ人はなかなか入れないと言われるが、今年は京都商工会議所青年部の人が町衆として参加することを受け入れられたと新聞に出ていた。今宮神社のやすらい祭も踊りに出られる人はその土地の氏子に限られているらしくて、西賀茂の人に聞いたところでは、やすらい祭にかかわるのは古い地元の人だけで、新しくできた住宅に移ってきた人は、何のことも知らないだろうと言っていた。昨年春に西賀茂と雲林院のやすら

いを見たけれど、雲林院の方は町中であるだけ見物も多くはなやかに見えた。それにくらべると、西賀茂は素朴で、見る人もほとんどない畑の中の道を、白い着物に赤い打ち掛けを着て、しゃぐまをかぶったやすらい鬼が、鉦と太鼓を打ちながら花傘をしたがえて、ひっそりと行くのは何とも強烈な印象である。あたらしい住宅の並ぶ辺りをやすらいの列が通っている時に、パジャマ姿の人が何げない様子でふらりと外へ出て来て、驚いたように祭の行くのを見ていたのなどは、まったく奇祭と言われるとおりの光景だった。

農耕の神、狩猟の神などをはじめとして、いろいろな神が祀られたのだから、その神を祀る集団は同じ目的を持っていなければならぬし、生活の基盤が共通していなければならぬから、けじめとして閉鎖的になるのは仕方のないことだと思う。祇園祭に古くからの八坂神社の氏子ではない商工会議所の人を、町衆として迎えるというのは時代の変化だろう。京都の中心部がビル街になって、住宅が消えていることは、誰の目にもはっきりしている。祇園祭を支えてきた基盤がくずれてきているらしい。

農村の湯立て式は、田植えじまいのほっとした喜びと、助けあったお互いへの感謝を込めて、ごちそうを作って分けて食べたのだろうけれど、今は機械を使ってさっとすましてしまう。昔のように、苗代作りに始まって、田おこし、畔ぬり、代かき、苗とり、田植え、と朝早くから日暮れまで働くことなどない。学校も農繁休業をして子どもを家の手伝いにやることはなくなったわけで、田植えの頃に、大きなやかんやけんずいの包みをさげて田の中を通う子どもの姿など、もう想像もできない。田植えの季節には、どこにも人の姿があって、日がたつにつれて、一枚また一枚と田が植わってゆく楽しさを、今は味わうことができなくなっている。しかしそれを楽し

いというのは思い出であって、作業をする人は、つらい仕事であったから、田植えじまいの宮まいりは、ほんの一息ほっとするものだっただろうし、その労働の苦勞が身にしみていない者や、他の土地から分け入ってきた人を仲間として、容易に受け入れ難かったことはわかるように思う。苦しみは憎しみを生むこともあり、人を寄せ付けない仲間をつくってしまうこともある。そんな田植えじまいも今では語りぐさになったのだから、宮まいりも少しずつ変わってくるはずである。

もう一度、最初までさかのぼって、氏神や氏子というものははっきりさせれば、ぎくしゃくした人間関係も理由が分かり、これからの方向を話し合うこともできるのではないだろうか。

ずっと遠い昔の人にとって、神はほんとうに生命にかかわるものであったということを読み出すと、小さなことにとらわれているよりも、一年に一度くらいは大勢の人が、何もかも忘れて神社の境内をぐるぐるとまわり歩くというようなことがあっても、決して悪くはないだろうという気がする。

※前号正誤 一五頁四行 祇頸像贊↓祇洹像贊

輝 映 澄 鮮

(中国の詩人と仏教 一三)

1992.06.24

原 田 憲 雄

前回の最後に引いた「田南樹園激流植援」は、四二四年、謝靈運四十歳ごろ、最初の始寧隱居時代の代表的な詩のひとつです。「山居賦」と前後し、「山居賦」の意図するところを要約して簡潔含蓄、そうして結びの二句

「賞心忘るべからず、妙善冀わくば能く同じくせん」は莊子の齊物論哲学を香気のように詩化しえたものといえましよう。と同時に慧遠が「廬山東林雜詩」を「妙は同じく趣きは自ら均し、一たび悟らば三益に超ゆ」の句で結んだ結構をただちに思い起こさせるのも「妙」ではありませんか。

かれの山水詩は、四二二年、三十八歳、永嘉の太守として中央の政權から遠ざけられたころから始まり、太守の職を辞して隱棲するこの時代がひとつの峰に達します。三十代のすぐれた詩句を摘めば次のようなものがあります。

過始寧墅（句）

422年 三十八歳

剖竹守滄海

海のべに司たまはり

枉帆過旧山

帆足まげふるさとたづね

山行窮登頓

山ゆくと山路をきはめ

水涉尽洄沿

水をわたると水上つくす

巖峭嶺稠疊

巖けはしく嶺たたなはり

洲縈渚連綿

中洲めぐり渚つらなる

白雲抱幽石

白き雲は石をいだき

緑篠媚清漣

緑の篠やささなみに媚ぶ

七里瀨（句）

422年

羈心積秋晨

たびごころ深き秋ざれ

晨積展遊眺

あした愁ふ眺めはるけく

孤客傷逝湍

逝く川のたぎちを傷み

徒旅苦奔峭

こごしかる坂にくるしむ

石浅水潺湲

石あさく水はせせらぎ

日落山照曜

日の落ちて山はかがよひ

荒林紛沃若

あらし林しどろに乱れ

哀禽相叫嘯

鳥さけびあふ声のかなしさ

登池上楼(句)

1938年 三十九歳

衾枕昧節候

病みふせば時だにわかず

褰開暫窺臨

とぼりかかけ暫しうかがふ

傾耳聆波瀾

聴きすめば波や耳うち

拳目眺嶠嶽

ながむれば 峰 目にそびゆ

初景革緒風

初日いで風ふきかはり

新陽改故陰

あたたかく寒さとほぞき

池塘生春草

池のべに春草うまれ

園柳交鳴禽

園の柳に奇しき鳥がね

遊南亭(句)

423年

時竟夕澄霽

雨やめば夕べ澄み霽れ

雲帰日西馳

雲帰り日は西に馳せ

密林含余清

ふかき林すがしさをなごり

遠峰隱半規

とほき峰みかづきかくす

登江中孤嶼(句)

423年

乱流趨正絶

流れわたり岸にむかへば

孤嶼媚中川

川なかにはしき小島や

雲日相輝映

雲と日と輝き映えて

空水共澄鮮

空と水ともにさやけし

表靈物莫賞

いみじさを賞づる人なく

蘊真誰為伝

つつむまことたれか伝へむ

想像崑山姿

崑崙の山をおもへば

緬邈区中縁

はるかなり世のわづらひの

ここにはまさに、これまでの中国の詩人の描いたことがない山水が歌われています。その新しさを一言で批評

するとすれば、「遊南亭」の「澄霽」がこれにあたりましょう。「澄霽」の二字をさらに分析するなら「登山江中孤嶼」の「輝・映・澄・鮮」の四字となります。「輝」は、光を発散することであり、「映」は、光を受けた対象がフットライトをあげたように輝くことで、その反面、光を受けない部分がフットライトからはずれた部分のように見えなくなることを含みます。つまり光と影とが彩（あや）なすわけです。映に「おおう」という訓があるのは、その「見えなくなる」一面を指すのです。「澄」は、水の静止して清らかなことであり、「霽」は、雨があがって空の雲や霧が拭かれたように消散することです。同じ清らかさであっても、「澄」は本来のものであるのに、「霽」は混濁を背景にもち、その混濁が消えたとき、清らかさがあらたに強調されるのが「鮮」です。鮮は新しい肉のあざやかさを表わすことですが、肉はまたたちまち新しさを失って腐敗破滅する危険をもち、み、そのような「澄」と「鮮」は、「輝」と「映」と相似た対応関係をもちます。「澄」と「霽」のように、矛盾を含みつつ、輝き澄んだ、高い調子をひびかせるのが、謝靈運の山水詩の特色です。これは、かれの時代にインドや西域から一挙に流入した大乘仏教の經典が奏でた調子と呼応していると、わたしには察せられるのです。謝靈運が二十七歳で廬山に登り七十八歳の慧遠に会った四一一年から、四十歳の四二四年ころまでの仏教史上の主だった項目を望月仏教辞典の年表から拾うと、次のような事がありました。

四一一 法顕、スリランカに滞在。曇無讖、龜茲国から姑蔵に入る。

四一二 慧遠、釈迦佛像を刻す。鳩摩羅什、成実論、十住論を訳す。

四一三 鳩摩羅什、寂。かれは生前、金剛般若經一卷、阿弥陀經一卷、大品般若經三十卷、百論二卷、雜譬喻

經一卷、大智度論百卷、妙法蓮華經七卷、維摩詰所說經三卷、小品般若經十卷、中論四卷、十二門論一卷など大乘仏教の主要な經典を訳出。

法顯、青州に着す。

四一六 法顯、揚都に還る。慧遠、寂（一説翌年）。

四一八 法顯、大般泥洹經六卷を訳す。曇無讖、海龍王經四卷を訳す。

四二〇 仏駄跋陀羅、華嚴經六十卷を訳す。石壁山招提寺建つ。

四二一 曇無讖、大般涅槃經四十卷を訳す。仏駄跋陀羅、華嚴經を再校す。宝雲、新無量壽經二卷を訳す。

四二二 宝雲、仏本行經七卷を訳す。

四二三 周統之、卒す。西域僧、曇良耶舎、建康に入る。

四二四 仏陀什、五分律三十卷、比丘尼戒本一卷などを訳す。曇良耶舎、建康に入る。

鳩摩羅什は秦の都長安にいて、江南の晋の国にはやって来ませんでした。廬山の慧遠をはじめ、建康の学僧たちは鳩摩羅什の訳業に注目し、訳出經典はすぐ取り寄せて写させ、研究していただきましたから、謝靈運もそれらを読んでいたにちががなく、かれは在俗の漢人としては珍しく、梵語さえ学んでいたのです。謝靈運が「法華の筆受」とすることの誤りは前にいいましたが、「涅槃經の筆受」なら通るかもしれません。というのは、曇無讖の訳した『大般涅槃經』四十巻本は、後に僧の慧嚴と慧観が修正して三十六巻本にするのですが、そのとき、謝靈運も作業に参加しているのです。その参加が「筆受」としてだったかどうかまではわかりませんが、四十巻本と

三十六卷本とでは、文章表現に特に添削したあとが見られませんから、謝靈運の役割は、梵語と訳語を対照する「筆受」あたりかもしれないと推察されません。慧観は鳩摩羅什の弟子で「法華宗要」を著し、仏駄跋陀羅とともに廬山にゆき、慧遠に仕えた人ですから、謝靈運との結び付きも自然です。

謝靈運が「法華の筆受」であることが誤りであっても、鳩摩羅什の訳した『妙法蓮華經』を読んでいたことは、慧観との間から察しても疑いのないところです。その『法華經』の「菓草喻品」には、

迦葉当知 譬如大雲

迦葉よまさに知るべし、たとえば大なる雲の、

起於世間 遍覆一切

世間に起こり、あまねく一切を覆うがごとし。

惠雲含潤 電光晃曜

惠の雨は潤いを含み、電光はてりかがやき、

雷声遠震 令衆悅豫

雷の声は遠く震い、衆をしてよろこばしめ、

日光掩蔽 地上清涼

日の光をおおいかくし、地の上は清く涼しく、

澩澩垂布 如可承攬

たなびく雲は垂れて、手にとるがごとし。

其雨普等 四方俱下

その雨はあまねく、四方にともに下り、

流澍無量 率土充洽

そそぐこと無量にして、地上に充ちみちたり。

山川險谷 幽邃所生

山や川や険しき谷の、ふかきところに生えたる、

卉木菓草 大小諸樹

くさや木や菓草、大小の諸樹、

百穀苗稼 甘蔗葡萄

五穀や野菜、砂糖きびや葡萄など、

雨之所潤 無不豊足

雨の潤すところ、

豊かならざるなし。

乾地普洽 藥木竝茂

乾ける地はあまねくみち、藥草も木々もならび茂り、

其雲所出 一味之水

その雲よりいでたる

おなじ味の水に、

草木叢林 随分受潤

草木も叢林も

分にしたがって潤いを受く。

の偈があつて、謝靈運の詩の澄霽にたいへん近いではありませんか。

また『涅槃經』（四十卷本）「壽命品」には、

南無純陀。南無純陀。

南無純陀、南無純陀、

汝今已具檀波羅蜜。

なんじ今すでに檀波羅蜜を具せり。

猶如秋月十五日夜。

なお秋の月の、十五日の夜のごとし。

清淨円満無諸雲翳。

清淨円満にして、もろもろの雲のかけなく、

一切衆生無不瞻仰。

一切の衆生、仰ぎみざるはなし。

汝亦如是。

なんじもまたかくのごとし。

と、

仏智能善斷 我等無明闇

仏智はよく

われらが無明の闇を断じたもう、

猶如虚空中 起雲得清涼

なお虚空のうちに

雲の起こりて清涼を得るのごとし。

如來能善除 一切諸煩惱

如來はよく一切の

諸煩惱を除きたもう、

猶如日出時 除雲光普照 　　なお日出のとき 　　雲を除いて光のあまねく照らすのごとし。

とうたい、また「如来性品」に、

又解脱者 名曰清淨 　　また解脱は 名づけて清淨という、

如水無泥 澄靜清淨 　　水に泥なく 澄靜清淨なるのごとし。

.....

又解脱者 名曰除却 　　また解脱は 名づけて除却という、

譬如満月 無諸雲翳 　　たとえば満月の もろもろの雲のかけなきのごとし。

というのは謝靈運の澄鮮への志向と近く、

「壽命品」の、

七宝林樹 花果茂盛 　　七宝の林樹 　　花果茂盛し、

微風吹動 出微妙音 　　微風吹動して 　　微妙の音をいだす。

.....

是諸池中 復有諸花 　　この諸々の池中に 　　また諸々の花あり。

優鉢羅花 拘物頭花 　　ウバラ花 　　クムズ花

波頭摩花 分陀利花 　　パドマ花 　　ブンダリーカ、

其花縦広 亦如車輪 　　その花は縦広 　　また車輪のごとし。

香気馥郁 甚可愛樂

その香馥郁

はなはだ愛樂すべし。

其水清淨 柔軟第一

その水清淨

柔軟第一。

というのは謝靈運の輝映を導くように感じられます。

かれの詩には落日をうたうものが多く、ここに引いたものにもすでに幾つかありました。落日詠と仏教との関連についてはすでに述べましたから、繰り返すことは避けませんが、その方向でもかれは時代の、中国の全詩史を通じての代表的な作者でした。

さきの年表抜粹に見える「石壁山招提寺」が「山居賦」に「招提を幽峰に建て」といったものを指すなら、その建ったのは四二〇年よりおくれで四二四年前後とすべきでしょう。そうして場所はいまの浙江上虞県の東山の一峰で、かれはこの寺を建て、学僧をあつめて仏教学を研究したり、遊樂したりしたのです。わが平安朝の貴族たちが別荘を寺にしたのは謝靈運あたりのまねをしたのだともいえます。ここでもかれは幾つか詩を作っています。

石壁精舎還湖中作

424年

昏旦変気候

あさよひに 気候かはりて

山水含清暉

山川は 光さやけし

清暉能娛人

さやけき光 あまりたのしく

遊子憺忘帰

遊ぶひと 帰るをわする

出谷日尚蚤

谷いづるとき 昇りそめし日

入舟陽已微

舟に入れば かげ かすかなり

林壑斂隕色

林 谷 昏れのいろ濃く

雲霞収夕霏

靄はれて 雲は ゆふばえ

菱荷送映蔚

菱と蓮 かたみにしげり

蒲稗相因依

蒲と稗 あひよりなびく

披弘趨南徑

くさわけて 小径をはしり

愉悅偃東扉

楽しくも 伏屋に着きぬ

慮澹物自輕

思ひあはく 事かろやかに

意愜理無違

心かなへば 理はたがふなし

寄言撰生客

撰生をねがふひとらよ

試用此道推

こころみたまへ 自然の道を

「招提」とは、梵語「チャトゥルディシヤ」の音をうつし「四方」という意味で、四方からこられたお坊さんを宿泊させる設備というほどの意です。中国で寺を「招提」とよぶのはこれが古い例らしく、そこにも梵語まで学んだ詩人の新しいものが好まれます。わが奈良の律宗本山唐招提寺の「招提」もこれにちなむのはいうまでもありません。

仏教に関心を深めても、幼い頃からの道家の哲学を捨てるわけではなく、儒・仏・道三教の調和をはかってそのいずれをも教養としてつきあつてゆくというのが、当時の多くの知識人貴族における流行で、かれはその代表であり、そうしてこれも、以後の中国の詩人たちの傾向を導いた祖、とまではいえなくても、有力な一人、とすることはできましよう。

さて、寺を開いて般若の空を鼓吹し、「山居賦」を作つて道家哲学を誇示してみせた謝靈運は、「こころみたまへ」と人に言つたように、みずからの処世にも「空」と「無為自然」をつらぬいておれば、その「自然」が、後の歴史家がいうであろうように、人民収奪の上に構築された仮山水にすぎないしろ、ともかく閑居を樂しみ、悠々たる審美的生涯を送りえたはずなのですが、「儒教」の冠をいただく権力意志と、世俗への執着と、貴族の虚栄は、とうていかれを仏・道がすすめ、自身さえが推薦した隠居生活には落ち着かせず、衆目を驚かせ、世間を騒がせるようなことを次々にしでかします。同じ仏教徒である官僚仲間に対してさえ、あいつに仏教がわかるか、といった罵詈謗をなげつけるのです。廬山の慧遠が生きていたら、上人の耳に入ることをも思つただけでももうすこし慎んだらうと想像されますが、この時期にもはやかれの狂燥を鎮静させる精神的な指導者はなく、かれのばらまいた騒ぎの結果として、さまざまな密告を受け、やがてはおのれを「皇帝への反乱者」にまで追い詰めます。そうして、反乱者にはおきまりの、逮捕・流刑・棄市。嶺南の広州で四十九歳の生涯を終えるのです。その悲劇は、くわしく描けば大河小説にもなるでしょうが、ここはその場所ではありません。伝記の大体はすでに出てゐる幾種類かの伝記研究にまかせ、次回もかれの詩についての話を進めましよう。

秋田よし穂句集

踏

青

192630

秋田みさ緒句集

えにし

原田憲雄

ちかごろ、身近かでわたしより若い人の訃報に接することが多い。ことし一月二十五日、秋田嘉徳氏。同じ数えの七十四歳だが生れはわたしより一か月ほどおくれる。長女恭仁子の夫治君の父である。五月十日、太田隆氏。六十三歳。わたしの翻訳編集した『妙法蓮華経新訳要品』による妙徳寺の法要を録音しカセットテープとするため尽力し、その普及に貢献された。六月十九日、巖祐一氏、六十歳。家内の妹慧女士の夫である。遺されたひとたちの悲しみを見聞きするにつけ、このように重く、苦しく、避けようもない、無常の諸行を積み重ねてゆくのが、老い、というものであろうかとも思い、遠からぬ日の靈山の再会が楽しかろう、ともおもう。

嘉徳氏は「よし穂」和子夫人は「みさ緒」の筆名で共に俳句をたしなむ。よし穂氏生前に計画し果たさなかつた夫妻の句集を、興一郎・治・建三の三子が刊行することにし、治が編集発行した。表紙には「踏青 秋田よし穂句集」とだけ記すが、後半は夫人の句集「えにし」である。発行所の「南瓜文庫」は、京大農学部を出て、農林省にながく勤め、退いて小菜園に晴耕雨読した故人にちなむのであろう。夫人の「あとがき」三子の回憶、ともに温く、若いころ「父に反感を抱」いて放浪したという治君の文が胸をうつ。

よし穂「ひとりイつゆえにかなしき月の闇」「孫といふまこと小さきもの昼寝」「妻に謝す爛熟うして古稀の夜を」みさ緒「生涯に夫一人とし銀河仰ぐ」「紅一点の孫さずかりぬ地藏盆」「在りし日のままの炬燵と浅田飴」※『方向』次号の発行は、都合で遅れるかもしれませんが、同人はつつがなく、他事ながらご放念を。